

『アロンの杖』における「生」

“Being” in Aaron’s Rod

染谷昌弘

SOMEYA, Masahiro

はじめに

D・H・ロレンス (D. H. Lawrence) (1885-1930) の七つ目の長編小説『アロンの杖』は1917年10月に書き始められる。それは第一次世界大戦が終結する約一年前のことであった。当時ロレンス夫妻は、ドイツのスパイという容疑をかけられ、当局によりイギリスのコーンウォール地方からの強制退去を命じられた。こうした大戦前後の動乱期に、不安や孤独感や憤りを抱きながら、ロレンスは『アロンの杖』を書き始めた。主人公のアロンや当時のイギリスの人々が共通に心に抱いていたのは、『アロンの杖』の冒頭にも書かれているように、「戦後の安堵感と別の何ものかの脅威」(5)であった。大戦が終わった後の静かで何も無い心の隙間にこそ逆に「脅威」がしのび込む。ついに、世界大戦という形で片をつけざるをえなかった時代の流れの中に立って、しかし本当の意味においては依然として片などはついていない、いわば見せかけだけの平穏さの中に、そこからひたひたと迫ってくるような静かな「脅威」を感じている。ついに、アロンは自らははっきりそれとは分からない心の奥深くの無意識の領域で何かに脅え、それを打

ち消してくれる何かを求め、妻と子を家に残して放浪の旅に出ることになる。第一章の『青い玉』でアロンはクリスマスイブの夜に買い物に出て、その帰りに酒場で時間を過ごし、そのまま家には帰らずにふらっと長い放浪の旅に出てしまう。「脱出の書」(序文XV)と言われる『アロンの杖』でアロンはなぜ「脱出」しなければならなかったのか、つまり、何かから「脱出」しどこへ行こうとしたのか。第一次世界大戦後のいわゆる「失われた世代」をロレンスはどのように描こうとしたのか。同じ時期に書かれた『無意識の幻想』の最後でロレンスは「ひょっとしたら、わたしたちはまだ生きてゆくことができるかもしれない。」と書いている。小川和夫も指摘しているように、第一次世界大戦後の惨状、そしてその元凶を迎えれば、19世紀初頭以来のニヒリズムという精神的な災禍の潮流は、人間が花のような、あるいは未開人のような「生」を生きることを阻止した。しかも、近代人の意識は、そのような「生」を生きることが不可能であるということ自体が合理的で正常なあり方であると判断する。しかし、本当は無意識下では花のような、未開人のような「生」を生きることを求めている。自分以外は信じるもの

キーワード：大いなる生、ニヒリズム、無意識、魂
Key words : great being, nihilism, unconsciousness, soul

を何も待たないのに、同時に無意識下では花と光のように他者との接触を求め「生」を全うしたいと願っているという矛盾。そしてそこから発する不安。このような状況の中でも、「ひょっとしたら生きられるかもしれない。」とささやかな希望をロレンスは抱いた（小川353）。この「不安」はロレンスだけではなく、アロンにとっても同じであり、広くは20世紀に生きた人々の共通感覚でもある。アロンは第一次世界大戦直後、「戦後の安堵感と別の何ものかの脅威」を感じるが、これはまさに、淀みのない「生」を全うしたいという無意識下の意識がニヒリズムに対して発している抵抗であり、恐れである。はたして本当にアロンは『無意識の幻想』のロレンスの言葉の通りに「生きられる」のであろうか。

1 Exodus（脱出の書）

主人公のアロンはイギリス中部の炭鉱町からロンドンを経てイタリアのノヴァーラ、ミラノ、フィレンツェと渡り歩く過程で、さまざまな人々と出会い経験を重ねることでアロン自身の思想の追求と発展を成就していく。この物語は旅行談としてのピカレスク小説、あるいは自己発見の物語としてのいわゆる「教養小説」、そしてまた、エキソダス、脱出の物語として捉える見方がある。また、その評価も両論あり、F・R・リーヴィスは「二流の小説」（Leavis32）と呼び、J・M・マリは「生命の泉」として賞賛している（吉村426）。表題の「アロンの杖」や章題の「塩の柱」は旧約聖書の「脱出の書」（“Exodus”）のモーゼとその兄アロンの逸話を想起させる。そのため、「脱出の書」の象徴としてのアロンという見方は当然十分に成り立つものである。アロンが放浪の旅に出る日、クリスマスイヴの

夜に、クリスマスツリーの飾り付けをしようとして、硬化ガラスでできている飾りの青い玉を子供たちが割ってしまう場面がある。

それは美しく硬く、べったりしていて、澄んだ銀色の線が入っていて、きらきら輝いていた。彼はしげしげと眺めた。そうだ、結局、こうなるようになっていたんだ。これでおしまいだ。彼の耳には、割れたときの柔らかな破裂音がまだ響いていた。彼は自分のものだった玉のかけらを火の中に投げ込んだ。（11）

クリスマスツリーに飾る青い玉はこれまでアロンがそして彼を取り巻くイギリス社会が守ってきた古い伝統や価値観の象徴である。青い玉が割られ長らく持ちこたえてきたイギリスの伝統や価値観が完全に崩壊してしまった以上、アロンは「約束の地」を求めて放浪の旅に出ざるを得なかったのだ。

知恵と慈悲に満ちた耳当たりのいい言葉には、常にその下に憎悪に満ちたおぞましい、殺人を引き起こす何か潜んでいるのだ。賢明な話や善良な意図、そこには、人間の内にある真の人間としての中核を破壊したがる陰湿で忌まわしい欲望が、蛆虫のごとく、常にまつわり付いているのだ。おかみであれ、この医者であれ、坑夫の集会の代表者であれ、あるいは善意そのもののような新聞であれ、誰かが大いに弁じ立てているのを聞くと、彼の魂はいつも、何か汚らしいものに強烈に反発するように、凝固してしまうのだ。彼の妻のむかむかするような善意と愛に対してもそうなるのだ。善意なんて糞くらえだ。悪意よりもはるか

に憎むべきものなのだ。毒ガスのごとく、正義の名のもとに行われる紛れもない脅迫なのだ。(25)

場末の酒場にまで浸透している口先だけの耳当たりのいい「善意」や「善良」という言葉。これらの言葉を頑なに共通の価値として守ろうとする偽善。アロンはその様な言葉の裏にコインの裏表のようにぴったりと寄り添うようにして、「陰湿で忌まわしい欲望」が存在していることに、腹ただしいのと同時に脅迫すら感じたのだ。この欲望とはヨーロッパの覇権を獲得、維持しようというイギリスの国家主義的な欲望である。このように、アロンは、多様で動的な「生」を単一化する近代の理念が元凶である当時の社会状況の中の日常的な偽善の言葉に、日常的であるが故に大きな「脅威」を感じ、そのようなイギリス社会に閉塞感を抱いたのである。機械文明がもたらした産業主義、物質主義の時代はある意味では人間を「幸福」にしたかもしれないが、その弊害として、人間疎外を生み、人間の情緒、魂、自然、生命は荒廃した。物質主義を支えた科学技術、理知主義、合理主義は人間の心を救いはしなかった。第一次世界大戦の大虐殺は、ロレンスにとって聖書の中に登場するガリラヤ湖になだれをうって飛び込んでいった豚の群れのようなもので、と手紙の中に書いている。(Letters, iii. 143)また、『アロンの杖』は自らの最後のシリアスな英国小説であり、『アロンの杖』とともにロレンスにとってのヨーロッパは終わった、とも書いている。『アロンの杖』の序文を書いたバイン(Steven Vine)は『アロンの杖』は「ヨーロッパに対する文学上の告別の辞であり、想像上のエキソダス、脱出の書である。」(XV)とも述べて

いる。

2 alone (独り)

アロンにとって、「約束の地」であるソドムはどのような場所なのか。当時のイギリスの閉塞感を打破し、「自由」を獲得する術はあるのか。イギリスは、広くヨーロッパは、豊かで自然な生の多様性を失くして、観念的で画一的で機械的な「近代」の「理想」によって硬直化している。このような、言葉や偽善的な建前、おぞましい機械的な理想が横行するイギリス社会から逃走して、アロンはalone(独り)であることになかに自由を見出そうとする。もちろん言うまでもなく、この自由は自分勝手の独りよがりなどではない。アロンが求めたものは、一人になることによる「自立」の道である。ロレンスは彼の小説『息子と恋人』においては、「母」からの自立を主張し、『恋する女たち』では、男と女のかかわりは、それぞれが独立を果たしながらも、同時に、ちょうど星の引力関係のように互いに平衡を保っている状態、つまり「星の均衡」が本来の関係でなくてはならない、と登場人物のルパート・パーキンに主張させている。そして、このような「自立」を果たすには、平面的な「愛」の観念の呪縛から開放されてなければならない、とも主張する。この「愛」はキリスト教を背景とする言葉であるが、ある意味で一面的で狭い観念とも言えるこの「愛」の呪縛を断ち切って、男は男として、女は女として、花は花として、「自立」しなければならないと言うのである。アロンが家を出て長い放浪の旅に出るのは、この「自立」を果たすためである。ということは、アロンはやがて再び妻のロティや子供たちの許に帰ってくる可能性があるということである。単な

る独りよがりの逃亡ではないのである。ロレンスは小説の最後まで、アロンの帰還については書いていない。そこに至るには長い時間がかかり、困難な道である。アロン一人の問題ではなく、イギリスの、延いてはヨーロッパ全体の問題でもあるために、ことはそう簡単に解決はしない。「究極の生きた結合」を果たすために、アロンは一旦は完全にalone（独り）にならなくてはならなかったのである。

このようにアロンは、ある境界線を越え、己は完全に単一なる存在であることに気づいた。そしてこの己の孤立や単一こそ、自己完成、自己成就、の一状態と受け取ったのであった。ロティとの長い闘いの果てに、彼本来の自己に行きついたのである。そして、人生に深く根ざして存在する一個の事物のごとく、実に物静かになり、生の不安から逃れることができた。百合の花のことを考えてみるがいい。そんなことは考えるまでもないことなのだ。百合は百合なりに懸命に働いて紡いでいるのだ。しかし、われわれが人生の糸を紡ごうとするときの緊張や不安は百合にはない、百合は生の根を張り、生をすべての中心に置いている。百合が悩むことはありえない。百合は生命そのものであり、その生きる期間が長かろうと短かろうと、小さな、繊細な泉を創造のままに湧き立たせて、不安になることはない。（略）ただ喜ぶかあるいは嘆くかするだけで、百合は自分の道を進んでいくことだろう。何が起ころうと、百合は完全に自身でいられるのだ。たとえ霜がその花を切り離そうと、そうなのだ。幸福な百合よ、おまえは固定観念の重荷を背負ったり、幸福や愛、完成などを追い求める偏執狂の掌

中に陥ることは決してないのだ。といってもそれは投げやりではない。生命の根がついているからだ。これまで百合について多くを述べてきたが、百合は生そのものを生き、単独で存在しているのだ。百合の花のように、人間も骨を折り、紡ぎ、奮闘する。そして、百合の花にならってわれわれ人間も、あらゆるものの真只中であって、自分の生命の道を歩み、自分の生命の道を独りで歩いていこうではないか。（239）

百合の例えは「野の花」として新約聖書にも書かれていて、ロレンスは当然これを下地にしているに違いないが、もちろん、聖書の内容とは必ずしも一致するものではない。アロンは、単一的な近代の観念に支配されるのではなく、彼自身の存在の孤独を認め、受け入れ、自己認識の核として生きようと決意している。一輪の百合の花の孤独は「大いなる生」(Great Being)を背景とし、その中に組み込まれているために、孤独でありながら、大いなる宇宙の生命の一部になっている。そして、孤独でいられるということは、自信や確信を抱いているということである。それは、「大いなる生」の存在が後ろ楯となっているからである。これは神の霊的な存在が後ろ楯になっている新約聖書の「野の花」とは異なるものである。この現代の人間が忘れてしまっている「大いなる生の実在」をアロンが実感する場面がある。

彼は横になって糸杉の様子を見守っていた。背の高い糸杉が呼吸をし、喋り合ったり、かすかに動いたりして、まるでそよ風の中を歩いているかのように見えた。そうしているうちに、彼の魂は彼の許を離れて

行き、はるか彼方の過去へと戻っていくようになった。恐らくそこは、現在とは時間の過ぎ方も違っているところだろう。彼は千里眼でも見たように、われわれが今生きている人生とは、生命の殻の断片にしかすぎないように感じた。そして今のわれわれには考えのつかないような人間生活が過去にもあったし、また未来にもありうるだろうという気がした。真に生であったものが人間から離れ去ってしまい、われわれにはただのかけらしか残っていないのだ。糸杉の木の暗くて叡智を秘めた沈黙と、折れ曲がった姿を見ていると、消滅してしまった種族や言語、そして今は消え去った人間らしい感情や知識のことが思い出されてくる。現在のわれわれには、もはや知ることのできないようなことを人間は知っていたのであり、感じ取れないようなことを感じていたのだ。実在していた大いなる生命は闇の中へと入ってしまったのだ。しかし糸杉の木は今もおそのことを記憶している。(370)

アロンがトスカーナの糸杉に「大いなる生の実在」を感じ取っている場面である。人間と自然との間に、まだはっきりとした区別がない混沌とした世界の記憶が、今のわれわれの生命の中にも残っているから、われわれはそれを感じ取ることができるのだ。アロンの孤独を支え不安を排除し、自信を与えているのは、意識的な観念でもなく古来からある知恵ですらない。それは無意識の中の「暗い生き生きとした、結実する力」である。しかし、アロンの存在はこの大いなる生の実在に完全に包摂されてしまうという訳ではない。アロンは無意識的であるのと同時に意識的な存在

でもある。この意識が無意識の暗い生の実在を照らし出し、輪郭を与えるのだ。その後、この「暗い生」との接触を果たし、それを静かに受け入れるのである。半分は意識的で、また半分は無意識的である。ロレンスはこの小説の中でこのことを「ある動物が眼を覚まして油断なく横になり、しかもその環境と一体となっているときに見せるような変によそよそしい表情」とか、「油断のない休息の楽しみ、己がすべての中心に充足しながら存在してる」とか、「犬が片目だけを開けて瞬きしながら日向ぼっこをしている」(407)という微妙で繊細な比喻を使って表現している。このように、アロンの意識には過去の記憶として、暗い糸杉の生の実在が呼び起こされる。それは、アロンの背景には確実に生の実在がびつたりと寄り添い、彼を見守っているからなのである。後で述べることになる友人のリリー、まさに「百合」という名前だが、このリリーはアロンに内在する大いなる生の実在や魂を喚起させるために多くの時間と労力を使ってアロンに言葉を投げている。「ぼくの言っているのは、内部から君を駆り立てるものが何かあるのかってということなんだが。」無意識の内の生の実在や魂を見出しているか、とリリーは問うているのである。リリーは、ロレンスの代弁者と言われていて、最終章の『言葉』ではアロンに対して魂とか大いなる生の実在とか男と女の本来の関係といったことを、彼にヒントを与えて考えさせながら、少しずつ説いていくアドバイザー的な存在である。アロンは少しずつリリーの言葉に引かれていって、後で述べることになるリリーの説く核心的な二つの衝動、「愛の衝動」と「力の衝動」の論理をある程度は受け入れている様子で小説は終わる。ロレンスは近代の観念的な

すべてのしがらみを断ち切り、個人が単独の魂を持ち独立することによってはじめて、人間の「生」を回復し、真の「関係性」を取り戻すと考えていた。これは近代の個人主義とは根本的に異なるものである。近代の観念的呪縛から抜け出し、完全なる孤立を獲得してはじめて、有機的な宇宙の実在との接触が果たされ、そうすることがニヒリズムに陥っているイギリスを、ヨーロッパを救う唯一の道だと考えていたのである。

3 「力の衝動」

リリーはアロンに、人生には二つの力強い大きな衝動である「愛の衝動」と「力の衝動」とがあり、われわれは「愛の衝動」から「力の衝動」へ移行しなければならない、と説明する。

「今や、愛の衝動は使い果たされてしまったのさ。にもかかわらず、それを力づくで動かそうとしているのだ。そこでわれわれは必然的に無政府主義者となり殺人者となってしまうのだよ。それはなんともひどいことだ。われわれは力の衝動をうけなければならないんだよ。……」(414)

第一次世界大戦後のイギリス社会の不安と混乱によって、アロンやリリーは信念の喪失と人間不信に苦しみながら、ある一つの脱出口を模索し始めていた。「愛の衝動」とは言うまでもなく、キリスト教を背景とした愛の論理である。しかし、キリストの教えは「理想」であり、「あるべき姿」であって、「不可能」なのであって、これらの不可能な理想から実は個人主義や自由主義が生じたとも言えるのである。キリスト教の「愛」の観念を土台と

しているイギリスや西欧社会は、この観念によって逆に支配され不自由になっているというのがロレンスの見解である。産業主義、商業主義による物質繁栄や科学技術、理知主義、合理主義、などはある意味で形骸化した近代のキリスト教文明の一つの産物であると言える。このような状況で人々は「生」を喪失し、真に人間として生きる道筋を見失った。ことさら、大戦下では国家という観念が強調され、個人が存在が抹殺され理不尽な状況が生み出される。これらはすべて、「愛の衝動」に行動原理を求めるイギリス社会の本質である、とリリーは、延いては代弁者であるロレンスは主張している。それ故に、「愛の衝動」ではなく「力の衝動」を土台とする社会を想定して、そこに現代人が陥っている不毛な閉塞状態からの脱出の可能性を模索しようとしている。アロンはリリーとの会話を通して、少しずつであるが心を動かされていくようである。

その力の衝動は、広大で不思議な生の力の源泉として現在のわれわれの内にも潜んでおり、本来のあるべき姿で活動するか、あるいは大破壊への道を歩むかのいずれかの瀬戸際にいるんだ。力……力の衝動。力への意思ではあるが、ニーチェの言う意味ではないんだ。知力でもない。精神力でもない。知恵ですらない。不思議な、生き生きとした、実を結ぼうとする力なのだ。ぼくの言うことが分かるかい。」(414)

同じように「力の衝動」を説いたニーチェでさえも、実は意識的な博愛の意志であり、愛の意志であった、と言うのである。それに対してリリーの説く「力の衝動」は意志でもなく、意識でもない。単純な「実を結ぼうと

する」やさしい「不思議な生の力」であると言っている。このあたりの説明は、意識では理解不能なことを言葉を使って何とか伝えようというリリーのあがきにさえ聞こえなくもない。それ程に、リリーが伝えようとしていることは意識よりもむしろ無意識に属するものであり、理屈というよりも感受性で捉えるしかない無意識の領域の「大いなる生」の力であるからである。もし、リリーの言わんとしていることがアロンに伝わらなかつたら、リリーは自分自身の「言葉」によって挫折したということになる。リリーは言葉を超えた事柄を結局は言葉によってしかアロンに伝える術はなかったのである。リリーが主張している「力の衝動」をアロンは必ずしもすべて理解し受け入れているわけではない。アロンはその言葉に疑念さえ抱いている。この疑念をもつアロンは、現代社会の現実の生活に則して堅実に生きようとするロレンス自身の一つの側面であるようにも思える。ロレンスの中にリリーという革新的な言葉を弄する思想家と現実の肉体を持つ保守的なアロンという二人の人物が同時に存在しているという見方もある。いずれにしても、果たしてアロンはリリーの言葉を受け入れることができるのか。「自分以上の英雄的な魂に生命のかかわりにおいて服従し、自分を明け渡す必要がある」とリリーはアロンに訴える。「じゃ、ぼくは誰に服従するのかね」とアロンは問いかけると、リリーは「君の魂が教えてくれるだろう」とだけ答えて、小説は終わっている。アロンがリリーの思想を理解し、「力の衝動」に「服従」するかどうかは書かれていない。オープンエンディングで締めくくることによって、読者に判断を委ねているようにも思える。

4 アロンとリリー

最終章『言葉』でアロンは奇妙な夢を見る。アロンは乗客として小舟に乗り地下世界の大きな湖を進んでゆく、それをアロンの第二の自我が船首あたりを飛び回り様子を見ている。「彼は気がつくだろうか、彼は気がつくだろうか」、「彼には聞こえないのだろうか。彼は注意しないのだろうか。彼は分からないのだろうか。」とこの第二の意識的な自我が水面に飛び出ている杭に肘をぶつけそうになるアロンを心配そうに見守る。この場合の第二の自我とは心理学ではいわゆる「超自我」と呼ばれるものである。この超自我とリリーとを同一視する見方もあるようだ。しかし、リリーは意識的な存在ではなく、現実中存在する人間であり、アロンにとっては指導者的な他者である、という見方のほうが適切であると思う。前章の『折れた杖』でついにアロンは自分の音楽家としての支えであるフルートを破壊され、失意のどん底に陥れられる。そして、リリーだけが頼れる存在であることを知る。その反面、この人間に屈服し身を預けることに躊躇する。リリーはアロンとともに「ダイナミックな存在様式の一つに組み込まれている」(416)存在であるが、また同時に異なる生命、人生を持つもう一つの個人であり、他者なのである。

アロンは横になったまま、いろいろと考えていた。そして自分につきまとう一人の人間に屈服すれば、長い間自分が走りつづけてきた袋小路から逃れることができるだろうと思った。どっちみちどちらかの方向に屈服しなければならないのだから、砂流のような女や、臭い沼地のような社会よりも、

むしろ一人の男の特別な支配力に屈服しようと思った。そうだ、今となつては、不思議な測りがたい一人の男に向かうのがよいと思った。（403）

魂を持つ個人は一人一人異なる存在である。しかし、有機的な宇宙の実在に、「ダイナミックな存在様式」に組み込まれている個人はもはや単独とは言えない。まったくの一人であることを知り、魂の孤立を保つことが自体が、「星の均衡」を成立させ、「大いなる生」のもとで他者との完全なる結合を果たすことに通じるのである。しかしアロンは最後までこのリリーが説く内容を完全には理解できないでいる。抽象的、観念的な「愛の衝動」から、「生」という大いなる実在に参入して「屈服」し、「力の衝動」へ移行するというテーマはロレンスの生涯にわたって追及されるものの一つである。彼の短編小説『死んだ男』の主人公のキリストを模した男が辿った道もまた同じであると言える。また、『恋する女たち』のルパート・バーキン、ジェラルド・クリッチもそうであった。リリーはアロンが辿るべき道の先において、アロンを導くいわば救世主である。戦後のイギリス社会の疲弊の中でアロンを支える杖であるフルートを失った今、リリーは少なくともアロンを支える新しい杖となる可能性を持った存在である。しかし、果たしてアロンがリリーの主張を完全に受け入れて、「屈服」するかは書かれていない。これは、一つの観念に完全に包摂されず、何らかの「澱」のようなものを残し、平衡を保つというロレンスのバランスのとれた物言いである。あるいは現象としての「生」は移ろい、絶対ではない、という意味も含まれているのかも知れない。いずれにしても、はっきりと

した断定や何らかの定義で終わらず、オープンエンディングの形をとっているのは、ロレンスの小説が、単一な観念的、抽象的な表現ではなく、両義的で多様な「大いなる生」の表現であるからに他ならない。

おわりに

第一次世界大戦後のイギリスの社会の中で疲弊したアロンの心は無意識的に出口を求めていた。大戦後の惨状、延いては19世紀初頭以来のニヒリズムの潮流によって、イギリス、大きくはヨーロッパの文明は危機に瀕し、その中に生きるアロンの心は疲弊した。ロレンス自身も小説中のアロンと同じように「ひょっとしたら生きられるかもしれない」とささやかな希望を抱いて、世界を旅しながら「生」を追い求めていた。『チャトレイ夫人の恋人』の有名な冒頭の言葉のとおり、ロレンスにとっては当時のイギリスは「大洪水」のあとの「廃墟」と見えていた。だからこそ、灰の中から500年ごとに復活するエジプト神話の「火の鳥」のように、燃え尽き、灰となった文明の中からの復活を遂げようとしているのである。花が枯れ、実を結び、再び花を咲かせるように、絶えず大きな輪を描き円環を成す花のような「生」を生きようとロレンスは考えていた。「未知の花」(the as-yet-unknown blossom)を咲かせようとして、ロレンスは最後まで彼の言う「やさしい」「生」の可能性を説き続けた。それは、「灰」となり「廃墟」と帰したヨーロッパ文明の惨状への明確でリアリスティックな認識が基底にあり、そこから生まれ出た「ささやかな希望」であり「夢」であったのだ。そして、これらは十分に叶う可能性を持っているものである。なぜなら、「生」は無意識の領域に押し込められてい

るだけで、確実に存在しているからである。近代文明によって鈍磨させられた感受性をもう一度働かせて、「生」を認識し再び復活し、ニヒリズムを超克しようとする「ささやかな希望」をロレンスは抱いたのであった。

引証資料

- テキストは Lawrence, D.H. *Aaron's Rod*. Ed. Mara Kalnins. Harmondsworth, Middlesex, England : Penguin Books Ltd.,1995.を使用した。尚、引用した邦訳はすべて吉村宏一、北崎契縁訳。『アロンの杖』。東京：八潮出版社、1988。に依る。
- Boulton, James T and Robertson, Andrew, eds., *The Letters of D.H.Lawrence*, vol.III. Cambridge : Cambridge U.P., 1984.
- Leavis, F.R. *D.H.Lawrence/Novelist*. Hamondsworth : Penguin Books, 1955.
- 小川和夫訳。『精神分析と無意識』『無意識の幻想』。東京：南雲堂、1987。
- Vine, Steven. Introduction. *Aaron's Rod*. By D.H.Lawrence. Ed.Mara Kalnins. Harmandsworth: Penguin Books. 1995.